

国語科 対面・遠隔学習指導 実践報告

1. 学年と単元 1年「国語辞典を知ろう」

2. 教材について

本単元では中学国語科の学習スタートとして、また授業開きの一つとして、生徒たちに国語辞典の活用を意識化・習慣化させることをねらいとしている。新しいことばに出会ったとき、その語義だけでなく使い方や類義語・対義語など、国語辞典を活用することで言葉の世界を生徒自ら広げ、今後の言語活動に活かして欲しい、中学3年間で国語辞典に多く触れることでことばに興味を持ち、言葉に対する感性を磨いて欲しいと願っている。生徒たちはデジタルなものにかなり早い時期から慣れている世代であるが、紙の辞書の活用を中学入学と同時に習慣づけることも意識させたい。本単元は、授業者が初めて担当する学年で必ず最初に行っている単元であり、例年は本校図書室で、実際に多くの国語辞典に触れてもらう形で行っているが、生徒の登校ができないため今年度は Moodle で3回の授業に分けて行った。言葉そのものを扱う教科、言語能力を育成する教科として国語の授業で紙の辞書を引くことを習慣づけることで、他教科や今後の様々な学習でも辞書類や書籍資料を使って探究活動を行って欲しいと考えている。

3. 本単元の目標／評価規準(重点/記録)

(1) 本単元の目標

- 国語辞典を使って語句を調べることで、辞書には個性があることを知る。 [思考・判断・表現 C「読むこと」]
- 辞書を身近なものとして捉え、積極的に辞書を活用しようとする。 [学びに向かう力]

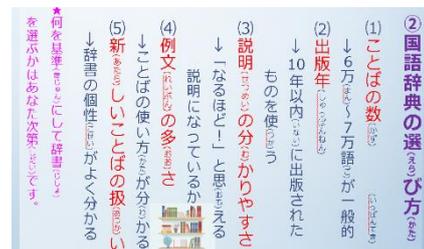


図 Moodle で紹介した国語辞典の選び方

(2) 本単元の評価規準

知識・技能	思考・判断・表現	主体的に学習に取り組む態度
国語辞典を活用しながら、辞書を使ってできることを理解する。 【語彙】中1ウ	辞書を使って語句を調べ、その説明には辞書ごとの個性について考える。 (記録)	言葉に興味を持ち、国語辞典を意欲的に活用しようとしている。

4. 生徒の学習の実際

(1) 授業の流れ

- 第1時：国語辞典でできること・国語辞典を使ってみよう
- 第2時：国語辞典の個性・国語辞典の選び方
- 第3時：『日本国語大辞典』とは・辞書に関することば「版・改訂・凡例・奥付」を知る

(2) 生徒の様子から

未だ登校できていない、対面で授業を行ったことのない1年生を相手に Moodle 上で行う授業であったため、生徒の国語辞典の所持状況・使用状況を把握できず、手探りの部分もある授業と

なった。生徒たちには「今手元に国語辞典がある人は、その辞書を使いましょう。家に国語辞典がない人は他の方法、例えばインターネットで調べても構いません。」と指示をするだけでなく、実際に国語辞典に触れるような授業内の指示や課題を出すように心がけた。

対面授業（国語の授業は7月に入ってから実施）が始まってみると、1年生ほぼ全員が真新しい国語辞典を持ってきていた。小学生用の国語辞典を使っている生徒は1年生全体で4名だったが、対面授業が進む中で「来週新しい辞書を買ってきます！」と宣言をし、翌週から中高生向きの辞書を持ってきた生徒もいて、7月中旬には学年全員が Moodle で説明したような基準（ここ10年以内に出版されたもの・収録語彙数が6～9万語）に合う辞書を用意してくれていた。

帰国生徒学級（竹組）に対しては、5月初旬に教科書などを家庭に郵送する際、一緒に国語辞典（『ベネッセ 新修国語辞典 第二版』）を一人1冊ずつ送った。この辞書は、毎年竹組の生徒が使えるよう、竹組教室に置いてあるもので、収録語約47,000語と語彙量は少なめではあるが、目的の語を探しやすく、語釈が簡明なものである。Moodleでも「竹組の皆さんは、先日郵送した辞書を使ってみてください。もし、自分が使いやすいと思う辞書が家にあったり、説明を聞いて新しく自分用に辞書を買ったりした場合はそちらを使っても構いません。」と伝えた。

5. 生徒の学習効果と展望

どの辞書にも必ず「凡例」があり、辞書で用いられている記号は同じ出版社でも辞書ごとに異なること、こまめに凡例を見て確認していくことを Moodle で伝えたところ、対面授業の中で自ら凡例を確認する生徒の姿がかなり多くあった。これは例年の、特に1年1学期の授業ではあまり見られないことである。Moodle で説明したことが例年より早く定着が見られた点と言えるだろう。

遠隔学習では国語辞典を使ってできることや中高生向き国語辞書の紹介を資料や画像を用いて行ったこと、「版」や「凡例」など辞書を使う際に知っておくべき言葉を学習したことで、新しく購入した辞書の所持率の高さ、また対面授業で辞書を引く場面を毎回の授業で設定する中で生徒たちの辞書の扱い方が例年よりも良い(例：凡例を自ら確認する、指示がなくても辞書を活用しようとする)ことが挙げられる。

「自分に合う辞書選び」の方法として、Moodle で(無理のない範囲で、と補足しつつ)「書店に行き、複数の辞書で一つのことばを引き比べる」ことを勧めたが、コロナ禍の状況で、どれだけの生徒が実際書店に行き、複数の辞書を引き比べることができたかは分からない。Moodle での説明を聞き、複数の辞書を引き比べることなく、授業者が紹介した出版社のホームページなどを参考にし、購入する辞書を選んだ可能性もあるだろう。

対面授業が始まったら、本校国語科で購入した十数冊の辞書、また本校図書室所蔵の十数冊の辞書を生徒に使ってもらう予定でいた。ところが、いざ対面授業が始まっても一つの辞書を複数の生徒が使い回すことができない状況であったので、購入前に複数の辞書を使ってみる場を対面授業で設けることができなかつたことは残念である。コロナが収束に向かい、生徒同士の物の共用ができるようになったら、異なる辞書を使う機会、辞書を引き比べる機会を授業の中で設定していきたい。また、本校図書室にある『日本国語大辞典 第二版』(小学館)も実際に触れる機会を設けたい。語彙を増やすことは全ての教科の学習の基盤となる言語能力を支えるものであり、それが国語科の担う役割の一つでもある。今後も国語辞典を活用する場面を多く授業で取り入れ、生徒たちが語彙を増やし、言語感覚を磨き、語彙を豊かにできるような授業を考えていきたい。